

小学校を拠点とした地域づくりの試み

担当教員：藤井麻由

魚住桃花、栗田凌平、杉山理恵、田畑裕柁、友田昌志、中貝将己、堀慎司

1. 背景・目的・概要

当プロジェクトは、北海道知内町立湯ノ里小学校で実施されているコミュニティスクール事業に、大学生という立場で参加し、小学校を拠点とした地域づくりを試みるプロジェクトである。コミュニティスクールとは、学校と保護者や地域の皆さんがともに知恵を出し合い、学校運営に意見を反映させることで、一緒に協働しながら子どもたちの豊かな成長を支え「地域とともにある学校づくり」を進める仕組みのことである。(引用:文部科学省HP)。年間スケジュールは以下の通りである。



2. プロセスと成果

私たちは、地域の課題を特定するために、湯ノ里小学校の運動会や1年生を迎える会、見守り隊への感謝の会など、各種行事に参加した。また、地域の方々とゲートボールをしながら交流を深めるなど、数多くのフィールドワークを実施した。継続的に活動を実施することで、地域とのつながりを深めると同時に、地域における課題を明確化することが可能となった。



見守り隊への感謝の会の様子

その中で、私たちが見つけた地域の特徴(課題)は大きく分けて3つある。1つめは、小学生世代と高齢者世代の関わりが密接であるが、中間世代(20~30代)のつながりが不足していることである。2つめは、住人の湯ノ里地区に対する想いの深さによる団結の深さがあると同時に、新しく湯ノ里に来た人にとってコミュニティへの新規参入が困難になっているということである。そして3つめは、「帰ってくる若者が少ない」という地域の方々

の声から、郷土愛を育むきっかけが不足しているのではないか、という点である。この3つの課題から、私たちは「共育」「特色」「郷土愛」というコンセプトを掲げ、本プロジェクトのテーマ課題である「小学校を拠点とした地域づくり」を具体化するために地域の方々と協力した大学生主催の企画を実行することとなった。企画の目標は「湯ノ里の特色を活かして郷土愛を育て共育の場を作る」ことである。この目標を達成するための指針として、多様な世代が参加できるような企画、湯ノ里に再び帰ってくるためのきっかけになるような企画を小学校と一緒に考えてきた。

そして、最終的に実施した企画が「YOUの里看板作り」と「ビュッフェ」である。「YOUの里看板作り」は湯ノ里の「湯」と「YOU」を掛け合わせて、地域住民ひとりひとりにとって「あなたの里」であるという意味を込めて作った題名である。内容は、湯ノ里小学校の子どもたちひとりひとりに絵を書いてもらい、それをつなぎ合わせて学校のシンボルマークである蛍の絵を作り上げるというものである。そのために地域の方々と小学生、保護者の方々、そして大学生が一緒になって作業することで、世代間交流を生み出すことを狙いとした。また、完成した看板を小学校内に設置してもらい、思い出の看板としていつかまた見に戻ってきたくるよう願いを込めて企画を行った。また、出来上がった看板の絵はポスターにし、町内会館など地域の方の目につくところに設置していただいた。「ビュッフェ」

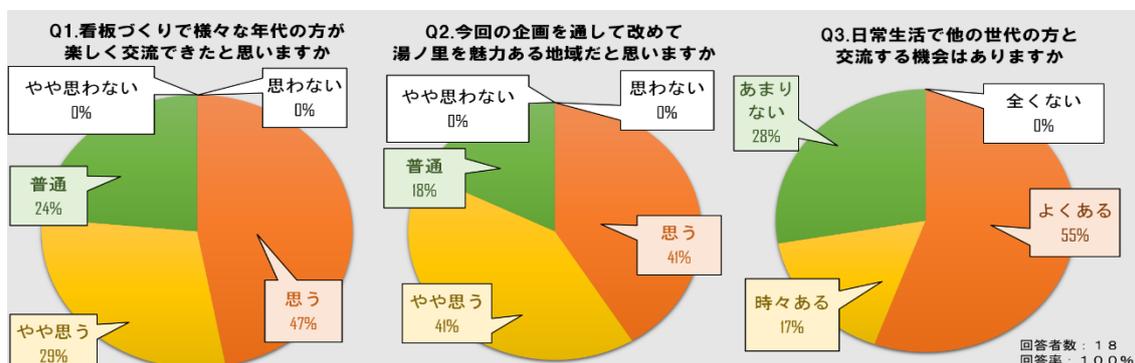


は、今までお世話になってきた地域の方々に感謝の意を込めて、プロジェクトメンバーの地元の郷土料理などを小学生と大学生で作り、一緒に食事をするというものである。写真はこの2つの企画の様子である。

3. 地域からの評価

企画当日、参加者に向けてアンケートを実施した。回答者は18名で、参加者の100パーセントから回答を受け取ることが出来た。まず、「Q1、看板作りで様々な年代の方が楽しく交流できたと思いますか。」という問いに対して、「思わない」・「やや思わない」が0%、「思う」が47%、「やや思う」が29%、「普通」が24%という結果になった。また、「Q2、今回の企画を通して改めて湯ノ里を魅力ある地域だと思いましたか。」という問いに対しては「思わない」・「やや思わない」が0%、「思う」が41%、「やや思う」が41%、「普通」が18%という結果になった。Q1・Q2から、企画全体の成果として、看板作りを通し世代間交流が出来ていたこと、湯ノ里の魅力、特色を参加者の方々が再確認できていたことがわかった。また、さらなる湯ノ里の魅力を感じられるような大学生の企画運営能力の向上が求められていることを感じた。そして、「Q3、日常生活で他の世代の方と交流する機会はありますか。」という問いに対しては「全くない」という方が0%、「よくある」が55%、「時々ある」が17%、「あまりない」が28%という結果になった。この「あまりない」

と答えた方の多くが中間世代（20～30代）の方々である。この結果から、湯ノ里地区内の日常生活で、今以上に小学生、高齢者、中間世代の地域交流の場を設けることの必要性を感じた。



4. 総括と反省・今後の課題

一年間を通した課題把握、コンセプトの設定、企画の実行を小学校を中心として行うことで、地域の現状（地域の方々の学校や子どもに対する思い、学生への期待の大きさ、住民の主体性）を具体性をもって把握することが出来た。湯ノ里地区は、小学生の主体性によるまとまりの強さと、高齢者の行動力によるまとまりの強さが存在し、それをつなぐ「つなぎ役」として大学生が介入することによって今回の企画を「郷土愛・共育・特色」のコンセプトのもと成功させることができたのではないかと考える。そして、アンケートから見られるこれからの課題として、学校・高齢者・中間世代のつながりの強化を実現するために、私たち大学生ができることは、「つなぎ役」としての役割なのではないかという結論に至った。一年間を通して活動してきた中で、私たちは中間世代の主体性を目にする機会も少なく、我々学生との交流も薄かった。したがって、これからは中間世代の地域に対するニーズを知り、それに応じて中間世代も巻き込んだ地域づくりを行う必要があると考える。

謝辞：

今回のプロジェクトを実施するにあたり、私たち大学生を温かく迎えてくださり、湯ノ里について多くのことを教えてくださった地域の皆様、未熟な私たちをサポートしてくれて、快く小学校の行事などに迎えてくださり、共にプロジェクトを作ってきて頂いた湯ノ里小学校の児童の皆様、そして先生方に厚く御礼を申し上げます。準備の段階や企画の中でも不手際がありご迷惑をおかけしたことが多々ありましたが、いつも温かくサポートして頂きました。毎回の訪問で、湯ノ里の皆様の温かさに感動しておりました。皆様のお力添えがあったからこそ、無事にプロジェクトを実行することができました。本当にありがとうございました。